

白秋童謡の分析 (2)

笹 本 正 樹

まえがき

「白秋童謡の分析 (1)」において、私は母親の面より考察してきた。そこでは 1 . 抱擁の母性愛, 2 . 同行の母性愛, 3 . 回想の母性愛といった童謡などがみられた。それらには母の慈愛がいかにこめられているかを見る思いがした。そうしたよい作品には、作曲家が競って曲をつけようとしている。

さて、白秋童謡のなかで、父親が対象となっているものはどれ位あるであろうか。そこでは母親について歌われたものと、どのように相違があるのであろうか。前論文のまえがきにおいて、私は母親について歌ったものより、父親について歌ったものは少ないのではないかと述べたのであるが、意外にそれは多かったのである。(「二重虹」の章, 28作品はすべて父より息子に語ったものである。) 数の上では母親を対象としたものより上まわっている。ただ、子どもに対する母親の愛情と父親の愛情はちがっているので、数が多ければよい作品も多いとは断じがたい。

いったい白秋はどのような父親としての愛をもって子どもに接したのか、それをどのように童謡として表現したのであろうか。

私は、当初、父性愛の表現された作品についても、前回の場合と似て「抱擁」とか「同行」ということを仮定していた。しかし、作品を調べていくうちに、父との関係はそういうものではないことがわかった。ここでは白秋の父性愛のこもった代表的な作品15篇を取り上げて、母性愛を表現したものとどのように異なっているのか、その創作心理と童謡のかかわりを分析していきたいと思う。

1 . 高志の父性愛

父親とちがって、母親は自分の産んだ子を抱きしめる。それは授乳行為のためでもあるが、可愛らしいからでもあろう。男性はあまりそうした行為をしない。女の子の生まれた時には可愛らしいと思うが、男の子の産まれた時には、ついその子の将来に期待をするようである。

現在では、女子もいろいろな職業的分野に進出して活躍するようになったので、女の子に期待していいわけであるが、戦前の白秋の時代（大正—昭和前期）では、女の子にそうした期待はしていない。白秋は長男（隆太郎）長女（篁子）のふたりの子に恵まれた。最初に生まれた男の子については、多いに期待していることが童謡をみるとわかる。

次のものは、長男の隆太郎が三歳の頃の作品である。とりわけ息子への期待は大きい。

二重虹

虹だ。虹だ。隆太郎よ。

ああ、あれはおまえのものだ。

父さんは手をあげる。

ああ、あれは二重の虹だ。

母さんも、あれ、手をあげてる。

虹だ。虹だ。おまえの虹だ。

向うの木までが手をあげてる。⁽¹⁾

雨後に虹がでるとめでたいものを見た感じになる。そして、子どもたちは喜ぶ。それは世の人に讃仰されるシンボルでもある。だから白秋は息子隆太郎に「あれはおまえのものだ」と言っている。「おまえの虹だ」と言っている。人間だけでなく、自然までが虹を讃仰しているのである。父も母も喜んで、二重虹（ふたえにじ）をみている。それは同時に、隆太郎に対する父と母の喜びでもあるのかのようである。

月夜の蝶

月夜の蝶蝶の飛ぶ姿，

坊やは知るまい，まだ見まい。

野良路，畔道，宵のくち，

すぐにも芝草しめります。

蝶蝶のお翅は雪のよう，
ひらひら田圃をわたります。

月夜は昼よりまだ青い，
藤豆，隠元，みな白い。

蝶蝶は揺れます，上ります。
お夢の空へとのぼります。

乾草小屋よりまだ高く，
大白星よりまだ高く。

坊やもねんねよ，おのぼりよ，
蝶蝶のお翅に乗せてあぎよ。⁽²⁾

蝶が夜にとぶのを知らないだろう，と白秋は隆太郎に話しかけている。夜でも野の道，あぜ道，畠などを飛んでいるという。しかし，後半になると，この蝶は空へのぼっていくのである。

ここでは上昇志向というものを，子どもに教えようとしたのであろうか。それともただ月夜の蝶は月をめざしていくのであろうか。

詩としては，翅が雪のようだとか，月夜は昼より青いとか，の表現に比喻の効果があったたくみである。高さも，最初は子どもの眼線でいき，次に乾草小屋，そして大白星と空にむけていく。蝶の翅にのって上昇するということにロマンがある。

海がらす

蒼い月夜の崖のうえ
あおい卵をひとつずつ，
脚にはさんだ海がらす。

海ははるばる，霧の海，
島は岩島，海豹島，
崖はきりそぎ，海がらす。

親は蹴落す，育てよと，
あおい卵をひとつずつ，
雹のふるよに音がする。

外は荒波，夜は寒い，
花の中から雛のこえ，
生まれましたと啼きたてる。⁽³⁾

獅子はわが子を千仞の谷に落とすといわれる。それほどわが子を鍛えるのである。百獣の王たるものはそれほどに不撓不屈な強さを必要とするのであろうか。

ここに登場するのは「海がらす」であるが，多分，カラが固いのであろう。そして，海がらすが一つずつ卵をもつのは，それが大きいからであらうか。場所は，崖がきりそがれている海豹島である。しかも，時は雹のふる霧の夜である。そうしたすさまじい背景の中で親鳥は新生児の誕生をねがって，岩に卵を落すのである。「生まれましたと啼きたてる」子どもの方も強い生命力を示して，ドラマチックである。

アントニオ上人と魚たち

今日はお説教，よい日和，
小さな魚たち，岸の方，
中ほどの魚，そのうしろ，
大きい魚たち，そのずっとうしろ，
岸から海まで，みんなばくばく並んだ。
上人さまよ，上人さまよ，
アントニオさま，お救い主よ，
空は青空，海は風，

なんとお顔のうららかさ，
なんとお声のおやさしさ。⁽⁴⁾

これは魚たちが聖人の話を聞いているところであるが，おだやかな調子で，学習することの楽しさ，幸福さを示しているようである。これが場をかえて，教室の教師と生徒となっても同じようであろう。よい学習をすることを，前もって子供に教えている童謡ともいえようか。

「なんとお顔のうららかさ」「なんとお声のおやさしさ」と上人のことを言っているが，同時に，上人の話を聞いている小さい魚たちも「うららか」な「やさしい」顔になっているようである。

月と帽子

長いお縁の
いい月夜，
誰か来てます，
ほう白い。

うちの簞子だ，
よちよちと，
お手手ふりふり
あかるいな。

硝子障子に
光る葉も
ふかいみどりも
揺れてます。

おお，おお，白い
雪帽子，

月のひかりは
こぼれます。⁽⁵⁾

女の子に対しては、白秋は母が見つめると同じような慈愛の眼でみている。そこではきびしさを要求するような感じはない。長女、篋子が一歳になったくらいであろうか。よちよちと歩いている様子がよくでている。

第一連では、誰かが来ていると期待をもたせて、第二連で篋子が登場してくる。第三連では「光る葉のふかいみどり」も歓迎しているようである。

こうした点をみていると、男の子へは期待し、女の子へは慈しみの感情をもつ、という相違があることを、まざまざと見せつけられた思いがする。

ねぼけ鴉

坊やよ、坊やよ、おやすみな。
もひとつお話しいたしましょ。

ねんねの鴉は寝ぼけ鳥
月夜はねむいし、およられず、
カンナ^{とも}のランプも点ります。

こくりこ、こくりこ、鴉の子、
乾ぐさ積んだでおねむいか、
蝶蝶の飛ぶ方をまだ見てか。

木戸にはりんりん、ちんちろりん、
遠くにがちゃがちゃ、南瓜畑、
月夜はこくりこ、こくりこよ。

こくりこ、こくりこ、こくりこよ、
月夜は、坊やよ、こくりこよ。⁽⁶⁾

上昇志向のみを要求したわけではなく、その子の安らぐことも肯定している。眠りの歌は「ねぼけ鴉」となっているが、それはまた子どものことでもあろう。前論文で引用した「揺籃の歌」と同様に、この歌もよい童謡となっている。ここでは父性愛的なものよりも母性愛的なものが、にじみ出ているといえよう。

白秋の父性愛の童謡は、子どもに話しかけて、しばしばそれが教訓的なものになっている場合が多い。むしろ、こうした自然的で構えない、母性的な眼でみている作品に、よいものがあるようである。

2. 耐窮の父性愛

第二次世界大戦を経て、復興をなしとげた日本は昭和50年頃から、豊かさの時代に入っていた。そして、昭和63年から平成3年にそのピークを迎えた。それ故、今の若者たちは、貧乏、貧窮といったものに、あまりかわりはないかも知れない。いわゆる赤貧洗うがごとく、などという人々は少なくなった。日本人は皆、みずからを中産階級と思っているようである。

さて、北原白秋というと、豊かな九州平野抑河の素封家に育った坊ちゃんで、苦労知らずのように思っている人が多い。しかし、食べるのに困った時期もあったようだし、生涯自分の家をもつということはなく終った。（一時期、大正9年、小さい洋館を建てたが、関東大震災でこわれてしまった。）

次の詩は「雀の生活」時代（大9）を回想したものであろう。今では考えられないほどに貧しい生活であったようである。⁽⁷⁾

お床の置物

坊やよ、おききよ、おぼえとき。

父さん貧しいその時は、

雀が啼いてもお米無い。

お床の置物、もらいもの、

紅いトマトに青胡瓜。

花瓶無ければ壺も無い。

徳利に唐黍，きびの出穂
お縁に搦鉢，野良の花。
お空をながめちゃ歌ってた，
お腹がすいても歌ってた。⁽⁸⁾

しかし，貰いもののトマトやキュウリはあったようである。白秋の詩は七五調が多いが，ここでは童謡のため八五調となっている。彼の童謡ではこの八五調が多い。

Tokuri ni toukibi kibi no deho ,
Oen ni suribati nora no hana。

しりとり調でリズムが好い。また，お空をながめちゃ，お腹がすいても，と頭韻を踏んでいる。自分の貧しかった時代のことを切々と訴えている。

しかし，自分が貧しかったときのことを，子どもに教えても仕方がないのではなかろうか。子どもたちはそういう時代を生きていないので，多分実感がわからないと思うからである。しかし，平成の大不況といわれるような時代がやってきた現在，やはり教えておくべきであろうか。

貧しい御飯

雀のおまんまお米粒，
わたしのおまんまお米粒，
雀もちょっちょとたべている，
わたしもぼろぼろはさんでる，
雀のおまんまもう無かる，
わたしのおまんま無くなった。⁽⁹⁾

淋しいので雀と遊んでいる。「我と来てあそべや親のない雀」という一茶の俳句があるが，どうやら孤独になると，人は雀と遊ぶようである。人との交際ができないときに，雀は相手としてちょうどよいのであろう。

お米の七粒

坊やよ、おききよ、おぼえとき
父さん貧しいその時は、
お米が七粒、銭が無い。
一羽の雀に粒一つ、
七羽の雀に粒七つ。
雀は啼き啼き食べていた、
父さんほろほろ遊んでた。⁽¹⁰⁾

白秋はいく度も「坊やよ、おききよ、おぼえとき」と言って、自分の貧窮の時代を歌って教えようとするのである。きっと、子どもが成長して、大人となった時に、貧しさに耐えられるようにと、子どもの時から教えておくべきだと思ったのであろう。一羽の雀に粒一つ、と言うから、自分ももう食べる米がなくなっていると見てよいであろう。

二度目の妻、江口章子はこうした貧しさによく耐える人だった。この頃は、白秋三十代前半の苦境のときである。

雀といっしょに

坊やよ、おききよ、おぼえとき
父さん貧しいそのときに、
雀といつでも遊んでた。
雀のお宿じゃないけれど、
どっさり雀が冬は来た。
赤い柿にも二羽三羽、
枯れがれ柳に四羽六羽、
破れ垣根に縁端に、
ちゅんちゅく、ちゅく、
ちゅんちゅく、ちゅく
父さんいっしょに、ちゅんちゅくちゅ、

破れ羽織を両手でひろげて、
父さんいっしょに、ぼういぼうい
ちゅんちゅく、ちゅんちゅく、
ぼういぼうい。(11)

貧しいけれども、この詩人は雀と一所懸命に遊んでいるようである。雀は「ちゅんちゅく」と鳴き、この詩人は「ぼういぼうい」と音頭をとっている。

妻の章子もこうしたことには理解があったようである。（彼女はみるにみかねて、白秋の全国の弟子から、寄進してもらって洋館を建てる。）しかし、章子はあらぬ誤解を受けて白秋のもとを去ることになるのである。

子鴉

坊やよ、坊やよ、ようおきき。
父さん熱出て寝たときは、
お悪戯の子鴉おとなしい。
いつでもいちにち枕もと、
お顔を傾げちゃ悲しそう、
トマトをつついちゃつまらなそう。
父さん厭をかくときは、
お薄団つついちゃさびしいよ。
お掌をつついちゃさびしいよ。
お庭にゃちらちら百日紅、
障子の穴から見えていた。(12)

先には雀がでていたが、今度は子鴉が登場している。雀や鴉は日常生活の身近にいるものであるから、取り上げやすかったのであろう。

雀の場合には、あまりそばには来てはいないようであるが、この鴉は近くにいっしょにいるようである。多分、飼っているのであろう。鴉は布団をつついたり、手をつついたり、トマトをつついたりして、ひとりぼっちが淋しいと言っている。しかし、最後の二行は、

ふたたび病気の白秋のふとんからの視線にかえっている。破れ障子の穴からは百日紅が見えている。

白秋は一人ぼっちのようであるから、これは章子がでていったあとであろうか。一人ぼっちの淋しさがよくでている。淋しいのは子鴉よりも、実は白秋自身であるように思われる。

いたずら子鴉

坊やよ、坊やよ、またおきき。
父さんまずしいそのときに、
一羽の子鴉飼うていた。
黒い紙筒、絹帽子、
頸には、ちりから、鈴の紐、
蝗は追います、田螺捕る、
朱墨をくわえちゃ、持って逃げ、
お筆をつついちゃ、啼いて逃げ、
いたずらばかり、鴉の子、
叱れば障子をやぶります、
黙ればお耳をかじります、
糞すりゃ絵の具の白ごふん、
父さん拭き拭きいそがしい、
お歌の原稿紙でこまったな。⁽¹³⁾

この鴉はずいぶんおしゃれである、絹帽子をかぶっている。首には鈴もつけている。そして、いたずらが激しい。筆をつつき、墨をくわえる。障子をやぶる。耳をかじる。白絵具のようなフンをする。「父さん拭き拭きいそがしい、お歌の原稿紙でこまったな」と言っている。

「お歌の原稿紙」で、この人らしい日常生活がにじみでている。フンが絵の具として表現されている。（擬物化の比喩である）子どもむけの詩にはあまり比喩はでないものであるが、こうしてでてきたところを見ると、やはり白秋が絵をかくのが好きだったことと、

かわりがあるであろう。彼の妹の家子も大層絵が上手で画家、山本鼎のところに嫁いでいる。

3．不在の父性愛

これまでは「高志」を教えようとした父親の愛情、また、子どもが成人したときに貧しさに耐えられるようにとの「耐窮」の父親の愛情の作品を見てきた。父親が登場するときの童謡はこのようなものが多かったのである。しかし、他のいくつかの作品では、父親が不在であることを暗示している。それは今で言う、単身赴任か、あるいは戦争のため出征しているのかも知れない。

ここにあると思っていたことが、ないと言うことに詩の技法としては効果があることがある。（例えば、見わたせば花ももみぢも無かりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ、藤原定家）あるべきものがない、というむなしさが詩的表現としては、現実にあるものよりも想像性に訴えることになって、面白い効果を生むのである。

次の童謡もそうである。狩人の爺さんは雉子射ちであるから、雉子を射ってくるはずなのに、雉子をもってこない。ここに何とも言えない意外性の面白さがある。

雉子射ち爺さん

雉子射ち爺さん、雉子射たず、
いつでも、しょんぼり下りて来た、
山からしょんぼり下りて来た。

雉子射ち爺さん、雉子見ると、
雌鳥かわいそ、雄綺麗、
子の雉子かわいそ、射たれない。

雉子射ち爺さん、雉子射たず、
谷底ばかり射って来た。
青空ばかり射って来た。⁽¹⁴⁾

この狩人の爺さんは、谷底を射ったり、青空を射ったりして、かんじんの雉子をうたないのである。雄も雌もその子も、かわいそうだといって射たないのである。実際には、こんな人はいないのだが、不在とか、否定性とか、空白性をおくことによって、かえって余情がただよいやすいのだと思われる。

その上、生きものを射ちたくないという動物愛がでている。生きているものの大切さを示している。このような童謡は、軍国主義時代にはあまり歓迎されなかったのではないかと思う。「しょんぼり下りて来た」の表現のなかに、自己否定―他者肯定の図式が、子どもにもわかると思う。題名も本当は「雉子射たぬ爺さん」であろう。

竹取の翁

野山かせぎのお爺さま、
いつも竹取、笹かつぎ。
ある日、ありやりと驚いた。
竹の根元に豆の人。

その子ひろうてお爺さま、
鳴くは鶯、よい日和。

これよ婆さま眩ゆかる、
おお、おお、かわいい、お爺さま。

それからしあわせ、篠の藪、
竹のふしぶし、金のつづ。

むかしむかしのお爺さま、
お伽ばなしのかぐや姫⁽¹⁵⁾

この「竹取の翁」にでてくる姫は、金銭を身につけて、捨てられた高貴な出の赤ん坊ではなかったのか。その話がいろいろと誇張されたり、夢幻化されて、天界にのぼる“かぐ

や姫”の物語となったのであろう。異星人の落し子との説もあるが、これはどうかと思う。

ここでは爺と婆はでてくるが、この姫には父と母がいないのである。父も母も不在である。こうしたところに、この姫への憐憫の情もでてくるのだと思う。ここでは父性の不在がかくれていて、その役割を爺さまがしているのである。

先生

岬の学校、丘の上、
棕櫚の木一本、夜は暗い。

先生おひとり、ぼっつりこ。

空にはチラチラ、星の数
四角の青い家一つ。

先生おひとり、ぼっつりこ。

燈に影ぼうしうごいてる。

ごうごう高まる浪の音。

先生おひとりぼっつりこ。⁽¹⁶⁾

この童謡は「二十四の瞳」を思い出させる。しかし、白秋は昭和十七年に57歳で他界しているので、壺井栄の有名な作品を知っているわけではない。ここでは生徒が不在である。

「先生おひとり、ぼっつりこ」としているのが、多分、宿直の先生であろう。今では、学校の夜番は警備員に任せているので、こうした情景はみられない。そのため、学校に対する愛情も薄らいだようである。昔は、宿直の先生のところに、その村の青年や村人が遊びにいたり、文化サークル的なものをやっていたが、昨今は学校が地域の文化の中心的役割をすることはなくなった。そうしたことはむしろ公民館に移ってしまった。

先生が一人、その影が灯によって映し出されることで、生徒の愛情が教師の方にむくのである。

雨の夜

坊やよ，坊やよ，あれおきき。
今夜も雨でしょ，きこえましょ。
雨夜のお話きかしましょ。

雨夜に来る鳥，巢無し鳥。
それこそ小さな秋の鳥。

父さんのお家は野良の隅，
雨戸をしめたら，もう暗い。

こまかな雨でも雨の音。
なおさら茂みは奥ぶかい。

それでも灯のすじ，話ごえ，
小鳥は恋しか，ついと来た。
雨戸をあければ，村を飛び，
ラムプでのぞけば此方見る。

かわいい濡鳥，青い鳥，
まじまじ眼あけて悲しそう。

おとなにおやすみ，やすみましょ，
もう雨止もうと，また閉める。

雨夜に来た鳥，巢なし鳥，
それこそ小さな秋の鳥。⁽¹⁷⁾

雨夜に来たのは“ 巢なし鳥 ”であり，“ 秋の鳥 ”である。それは“ 濡れ鳥 ”で，“ 青い

鳥”である。ここでも「巢なし鳥」というところに基本的なかなしみがある。

「小鳥は恋しかついと来た」どこにいてよいのかわからない鳥，そこでは子どもたちに同情を呼ぶことになる。ただし，今の子どもたちはランプを知らないであろう。こうした鳥を見る機会も少ないかも知れない。

ランプを窓に

ランプを窓に，妹のエルケ，
兄さま待ち待ち，妹のエルケ，
毎晩，海見て，
あかりをつけて。

ランプを窓に，妹のエルケ，
幾年経っても兄さま見えぬ，
毎晩，海見て，
あかりをつけて。

ランプがつかぬ，どうしたエルケ，
兄さま待ち待ち，とうとう死んだ，
それでも海見て，
お家の方で。⁽¹⁸⁾

この童謡は兄妹愛をうたったものである。しかし，妹の兄に対する感情は自分を保護してくれる父性愛的なもののようなものである。そうした父性愛の代理を求めているといえよう。この兄はいつかはくるのであろうか。希望はあるようである。しかし，待っている方のエルケは待ちこがれて死んでしまうのである。この兄妹に親はいるのであろうか。父も母もいないようである。だからこそ，エルケは兄を待ちこがれるのである。

しかし，エルケが死んでも，兄はやってこないであろう。そして，二人とも死んでしまうことで，この物語は完結するように思う。それは子どもにとっても，あまりにも悲しいがこういう現実もあることを教えているようである。

今夜のお月さま

海のあなたに出た月は
今夜はべに色
茜色。

父さま若しかと出て見れど、
お船の煙も
まだ見えぬ。

いくさが果てたか、死んでてか、
お鳩のたよりも
まだつかぬ。

今夜のお月さまなぜ紅い、
血染の色して
なぜ紅い。(19)

「いくさが果てたか、死んでてか」この表現は、当時においては反戦ものであったであろう。「血染の色して、なぜ紅い」と歌ったところを見るに、父親は戦の弾に当たって死んだということを暗示していると思う。軍隊の船に乗っていたか、それとも商船にのっていたのかはよくわからない。月さえ紅色、茜色である。お鳩の便りは伝書鳩のことであろう。そうしたところを見ると、やはり軍人であろうか。この童謡の次に「白い鳥」がのっていて、たしかに死んでいるのである。

白い鳥

吹雪の晩に
凍えた鳥か、
白い鳥が一羽

紅い果^みくわえて

空の方向いて死んでいた。(20)

ただし、この童謡の鳥は父なる鳥であるかどうかは判明しない。北原白秋はこういう童謡を書いてのち、日本が珊瑚海の大海戦をしている頃に逝去した。57才であった。(21)

白秋逝去の当時、息子の隆太郎は20才であった。この時点より息子にとって白秋という親は不在となったのである。永遠に——そして白秋という鳥は確かに文化という紅い果実をわたしたちに残したのであった。

あとがき

北原白秋（隆吉）はその幼年時代において、比較的恵まれた環境にあったので、祖父母、父母、弟妹との愛情関係も豊かであった。だから詩的表現、童謡などもののびのびとして感性的なものに溢れている。(22)

大正十一年三月、長男、隆太郎が生まれ、大正十四年六月、長女、篁子が誕生したので白秋が童謡をつくるようになるのは、これらの二子の誕生と深くかかわっている。男の子には、高い志を大切とし、窮乏のときにも負けない精神を与えたかったようである。そして、父なき存在の子をも想像のなかで愛情を寄せて表現しているのである。

母性愛の童謡と父性愛の童謡とを比較してみる時に、母性愛の作品にはよい曲がついて多くの人々に歌われているものが多い。しかし、父性愛の方の作品には曲のついたものがみあたらない。そうしたところを考えるに、子どもと言うものは、父親の愛情よりも母親の愛情を多く必要としているものだということであろう。ただ、母親の方は子育てもあって全身全霊をもって、子に接するところがあるが、男親は仕事に多くのエネルギーを割いて、子どもに接するのはたまにであるから、つい説教調、教訓調になるのであろう。とくに、男の子については将来、社会にでて働くときこれでよいのか、という思いがつよい。白秋の場合でも例外ではなく、そうした傾向があったようである。

母の愛は無償のものだとよく言われる。それに較べて、父の愛は教えたり、希求するものがある。母の愛を肯定的愛とすると、父の愛は批判的愛（否定的をふくむ）なのかも知れない。

シェークスピアの四大悲劇をもちだすまでもなく、君主への愛、父母への愛、夫婦の愛、子どもへの愛、などがうまくいかなかった時に、私たちは最も悲しさを味わうようである。

わが国は日支事変や太平洋戦争で多くの子どもたちが父親を失っている、白秋は詩人として、そういうところにも思いを寄せていたとみられる。彼はガタルカナル大決戦の頃に、その57歳の生涯を終っている。（昭和17年11月2日）

戦後、女性の社会的進出によって、家庭でゆっくりと母性愛をはぐくむことが少なくなった。経済闘争のため男性は企業戦士として夜遅くまで会社のために尽し、また単身赴任も当然のこととなった。父親が子どもに会う時間はまこと少ない。しかし、子どもが育つその揺籃期においては、豊かな父母、兄姉弟妹（そして祖父母）の愛に包まれていることが、どうしても必要である。こうした精神的に貧しい時代であるからこそ、またよい童謡を聴かせて、子どもの情操を豊かにしたいものである。

註

- (1) 与田準一編「からたちの花」(北原白秋童謡集)，新潮社，昭32，88頁
- (2) 同上 94頁
- (3) 同上 142頁
- (4) 同上 109頁
- (5) 同上 133頁
- (6) 同上 94頁
- (7) 北原白秋「雀の生活」敬文集，新潮社，大9
- (8) 「からたちの花」 90頁
- (9) 同上 106頁
- (10) 同上 106頁
- (11) 同上 106頁
- (12) 同上 93頁
- (13) 同上 91頁
- (14) 同上 48頁
- (15) 同上 59頁
- (16) 同上 49頁
- (17) 同上 103頁
- (18) 同上 117頁
- (19) 同上 32頁
- (20) 同上 33頁
- (21) 笹本正樹「北原白秋論」五月書房，昭50，306頁
- (22) 同書，第一章「薄愁の情調」第一節“稚き野の花” 13～40頁

Analysis of Nursery Rhymes by Hakushu Kitahara

Masaki Sasamoto

Abstract

The author pursued his expressions of the nursery rhymes by Hakushu Kitahara (1885 - 1942) . He wrote twenty eight nursery rhymes on Father : four about Father's hope on his son, six about imitating Father' austerity, and five about the absence of Father. People in every country will appreciate his rhymes referring to the gentle heart of Japan.

高 松 大 学 紀 要

第 31 号

平成11年 3 月15日 印刷

平成11年 3 月19日 発行

編集発行

高 松 大 学
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064